特別
チ12
3656
25

412
3656
25

慶應義塾大学図書館

次第

山よりも出はかの岡面くに行きや
ーーー

（一九八、一二二、一二二、三一）
紅葉より殘る部分迄まさに乃殘に
（一九九、一二二、一二二）詞
ぼるふるくわく　恵人ほとよ
ぶ迄ふやや殘手本ぶあたわさ
きくよいだきりくくはあさわみ
面白らはくやくと思ひひ面白や
比ち神世月十ねあまわ求くぶ
末末もくうまこて枝よのうさ乃

もくちぶきくこ後くのち猿
まくもぶの気ひくひとはぶ乃
部めちくぶうみう形ぶ楚喚止や
係よ付面り降まこてんぐ殺よ
由ち巻ち成やくわ乃作立ちわ
ちくぶ殺ワうきいや世思ひん
（手詞）なくく清傍ぶ乃面とまへい

年詞

家よりて たちまち 折ひとり 花

咲ける 所面を ながめ

見よ とて こそ 名をためよ

ゆくとやうの 五字詞 うち 折ふし 所面 深

亭 とて よ ― き 所 なれば 心 を も

志 ― 名 て 立 よ り 春 折 ふ り 花

思へ ば こ そ や ま よ ま ま な れ 早詞 実 こ

見 な る 歌 を こ そ 折ふし 所面の亭と

か こ ま ま ま わ が 折 り ― れ も ― ち

さ ま ― ― へ ― 折 を 以 り 人 乃

た て を ま ま た る 所 ま て ― り

是 い 藤原の 宣 方 ― て 置 き

ま る 所 な る ど ん や こ 折 ― と 付

ま ま ― ― 心 す こ と を 志 ― 折 物 名

なる社ハとそぎ富士成たてなる
面乃比若とく〳〵ハ爰ゝて
うゝなる所ひゝとかわ
ごゝを爰といひおまうゝ世いひ
ぞ心をもゝ社めゝてゞ道孫社
法を成と爰たまひば法華経を
法華ひあまゝ世ゝゞらめ案雅さ世

ゝゝゝ

きわなくて時雨と義を志るとと
心殘(トヽム)の方なよりあわくわ
神垂月だり下さとくわ志く神
うめ巻むぜ弥くとう義よ私乃
思よとかくきたるぞ(ヒキエカル)ものこの
事をやへき 実あり神なる
言は葉の形ぞくも時雨ハ俗乃
がよ小踐る沿なくて人を
あくなるよ小志くをう先きハ
くもりを弥世よ 地主乃孫を
祈もをぬ見う一秋乃作の富里
河若なう神をなくそくふ
心を志きと 祈うに乃下
ふ山も宿を著乃時雨くそぐく

心すべしとて人々歌を志ざしも
夢のよ[illegible]たゆめ[illegible]や定家の
[illegible]時面影[illegible]
波かぜ[illegible]
あまの[illegible]の霧乃
[illegible]にも[illegible]
ゆゑ[illegible]

心さしは小さく石塔のとよ墓所へ
案内[illegible]
宗[illegible]
石塔[illegible]
見[illegible]石塔をこそ[illegible]
[illegible]
[illegible]

人乃ものゝ
武子内親王の法華
経をかき
給ふ
いつくやまなる
法華経
賀茂乃社のみや
詞
詞
詞

たゞひとゝ
社ひ
法華経
なほ
ひとかた
たまひ
詞
詞
詞

ば理を後帝ひたすらに祈る後
京殿をんりゑ　　こまぬもれを
吉野心のたりの乃宿まゐ世ひて
通ふ人ちたちは露乃世ふるさと
よ世ゆかふ　　そい玉乃をよ孤
ひたたくゆかへい世ふ孤
事孤よけるふ心乃ゐ業孤

第後徳より出ちめ　ちきまとて
又ままくゝ乃なりとまわて
昔ち物を思いさまま後の心う
たてゝ　　或ふ　あつ行きま
雲よわたもよ柄そこ世こに
物まゝやゝあひ孤猫の波乃
ま乃昔ゞ業ひをゝ空見巻き

さて賀茂乃神院すべらもぬりてこ
ゝとゝ所なる社とも神やうまをけも
なわよく世人のち業をかさに
ゝゝゝ

ゐて住るあたちなどこう神
面白さるる前乃殿もむすぼうま
ぼ拾ちもよきえうへる高槻を
たれ老仏へや　姫まるすを
きくうてねもほと明く
くれたとわあ面しやはち旅
やうな　たまとてもなふ方の

たくをあくちふ乃雲み杯うし
ぬきうわを踐まても形よそ
なふ　よしやなふ乃えの姫せ
ごよを出よを出をも　まハ
はくまし　はうへをび神うう
武子内歌をぞまをえ　まをせ
下さと行すをうけ神ふ乃

[illegible]
[illegible]
[illegible]

ふかきもいまの方成ゆめも
うたゝ寝ぶかく成ども
是世乃世となりて隠も殘らん
ばかりなるくのあるはぞ哀ハ
陳子嵩なるそとをはまなふ
宗教うるはしぶ見へやはる
是ばかりなる陳子嵩や明あ

ばかり一やぶ佛事ふかく成ぬ一味面
ば宗旨は所要不同　法華経より
ハあゝ浪の立たるぬるふなる
はまそも若人乃ぞあうはゝ
男成とも孝神てがふゝそ人
ひとおなとゝ孝よぶ孝ぶ孝や
後編志好ふい樂を時用よなる

仲さな科やはぬ典ても法く
なまれあるさる科をれ心ゆ著成
うけハ所まてゞ佛をたゞき科ゆ
面　慈さうやくよもく
ゞ科うゝへ所ら法力をしへ
あ下まゆ露乃めくゝ成う光て
ゆ法も所ゝ　三ほ成ゆ

上三の月
一味乃法のあめ科さゝくまる
久所うはかひてゞなまれ国ゆまゞ皆
まゆ佛乃きゞ成えぬまいゞ宮ゆ著成
かゝほなゝくゝもゞほ科くゝとくく
ひろゝ科をよ科くゝとえよハ
車乃火宅ゞ成出ゝゝほさゝくさゝよ
ゞ乃新世よゆ中をゞあまゝ

雲井に花の袖もをりかは
うへすがるを舞姫の小忘
おもかの乃藤に　あまを下風な
かぜ吹まひの あまを佳面や散
れも散やかぜゆ乃ふ猴や散
あらまほしき月に新はをも
くもまちよ　この春に乃下越

いとあ
霞と消てもはたあや葛の葉
うらぶるの水の　ふ寸く失耶しや
ま乃やどの春乃　ちまわに乃愛乃
うちにとあまは　ふるとき乃り
あ原をくれの　葉に乃ま
ちひ下とりく　やぞ春の春